

(社) 東洋音楽学会西日本支部 支部だより
Newsletter of the West Japan Chapter, Society for Research in Asiatic Music
第50号 (2004年8月31日)

定例研究会のご案内

● **第220回定例研究会**

と き 2003年9月18日(土) 14:00~17:00

ところ 国立民族学博物館 第6セミナー室 (次ページ参照)

資料紹介

「国立民族学博物館所蔵日本コロムビア『外地』録音資料について」

福岡正太 (国立民族学博物館)

研究発表

「日本の近代化と録音技術」

細川周平 (国際日本文化研究センター)

「『外地』録音台湾資料のデータ整理の現状とその意義」

劉 麟玉 (四国学院大学)

● **第221回定例研究会**

と き 2004年11月20日(土) 13:00~

ところ 国立民族学博物館 第6セミナー室 (次ページ参照)

研究発表 (13:00~13:45)

「インドネシアにおける地方分権と文化政策~西ジャワを例に」

福岡正太 (国立民族学博物館)

展示見学 (14:00~)

国立民族学博物館特別展「アラビアンナイト大博覧会」 (自由見学)

* 定例研究会ご出席の方には、「アラビアンナイト大博覧会」招待券を若干確保しております。なお、当日14:00から、国立民族学博物館講堂にて、みんぱくゼミナール「音とイメージによるアラビアンナイト — 西洋音楽にみるオリエンタリズム」(入場無料、解説:水野信男)が開催されますので、ぜひご参加ください。

● 国立民族学博物館交通案内

- ・ 阪急茨木市駅・JR 茨木駅・北大阪急行千里中央駅からバスで日本庭園前下車徒歩 15 分
- ・ 大阪モノレールで万博記念公園駅下車、自然文化園を歩いて徒歩 15 分（自然文化園の入園料 250 円が必要になります）。
- ・ 大阪モノレールで公園東口駅下車徒歩 13 分
* 第 6 セミナー室は 2 階にあります。正面入り口から入り、2 階におあがりください。入館料は必要ありません。国立民族学博物館の詳細は、「みんなくウェブサイト」 (<http://www.minpaku.ac.jp/>) をご参照ください。

■ 第 217 回定例研究会報告（追補）

<発表要旨> 「ショスタコーヴィチの交響曲第 5 番をめぐって」

安原雅之

ショスタコーヴィチの交響曲第 5 番は 1937 年に作曲され、同年 11 月 21 日にレニングラードにて、ムラヴィンスキーの指揮で初演されたものである。スターリンによる、いわゆる「血の粛清」の時代に書かれたこの作品は、作曲家の人生においても、また彼の作曲様式という点においても大きな転換を示すものであるが、この交響曲の受容史をショスタコーヴィチ研究史と掛け合わせて考察することによって、この作品に内在する諸相を浮かび上がらせることが、このペーパーの目的である。

ショスタコーヴィチの受容を考察する際には、受容する側の立場を明確にしておくことが必要である。とりわけ第二次世界大戦後の冷戦時代における受容に関しては、二つの超大国によって二分された世界において価値判断の基準が大きく異なっていたこと、さらに 1991 年のソ連崩壊を境に社会的状況が大きく変化したことを考慮しなければならない。研究史を考察するにあたって次の文献を取り上げた。

Volkov, Solomon. 1979. Testimony: The Memoirs of Dmitri Shostakovich as related to and edited by Solomon Volkov. New York: Harper & Row. [邦訳：『ショスタコーヴィチの証言』水野忠夫訳、中央公論社、1980 年。]

Fay, Laurel. 1980. "Shostakovich versus Volkov: Whose Testimony?" The Russian Review 39: 484-93.

Khentova, Sof'a. 1985-86. Shostakovich: zhizn' i tvorchetvo, tom 1-2. Leningrad: Sovetskii kompozitor.

MacDonald, Ian. 1990. The New Shostakovich. Boston: Northwestern University Press.

Glikman, Isaak. 1993. Story of a Friendship: The letters of Dmitri Shostakovich to

Isaak Glikman with a commentary by Isaak Glikman. Moscow: Kompozitor. [English translation by Anthony Phillips published by Cornell University Press, 2001.]

Khentova, Sof'a. 1994. Udivitel'nyi Shostakovich, Sankt-Peterburg. [邦訳：『驚くべきショスタコーヴィチ』 亀山郁夫訳、筑摩書房、1997年。]

Wilson, Elizabeth. 1994. Shostakovich: A Life Remembered. Princeton: Princeton University Press.

Taruskin, Richard. 1997. "Shostakovich and the Inhuman," In *Defining Russia Musically: Historical and Hermeneutical Essays*. pp. 468-544. Princeton: Princeton University Press.

Ho, Allan B. and Dmitry Feofanov. 1998. *Shostakovich Reconsidered*. Toccata Press.

Fay, Laurel. 2000. *Shostakovich: A Life*. New York: Oxford University Press.

まず、この交響曲が初演当初にどう受け取られたかについては、1938年1月のモスクワ初演に際してあるジャーナリストがつけたと言われる副題「正当な批判に対するソヴェト芸術家の創造的な答え」にみることができよう。また、同じ時期に作曲家自身は「不屈の活力と闘争の緊迫、宇宙的な社会的歴史的衝突のドラマ」という言葉を残している。これらは長い間、西側においても一般的に受け入れられていたが、Volkovによる『証言』によってそれは覆される。Fayの1980年の論文がこの『証言』の信憑性に対する疑いを指摘しているが、『証言』の影響はその後のショスタコーヴィチ研究にも尾を引いている。その代表的な例は、第5交響曲における不気味な不協和音を、スターリンの象徴と解釈するMacDonaldの著作である。ロシアを代表するショスタコーヴィチ研究者であるKhentovaの著述では、ペレストロイカ以前と以後ではこの交響曲に関する記述が大きく異なり、受容史的に興味深い。また、1990年以降、Glikman、Wilson、Fay（2000）の著作が出版され、ショスタコーヴィチ研究に大きな変化をもたらされた。実証的なこれらの研究は、第5交響曲についてもより客観的な史実が綴られている。たとえば、Glikmanは、第5交響曲の初演の際に少なからぬ専門家が必ずしも成功を確信していなかったことを伝え、またWilsonとFayの研究は多様な立場のコメントを客観的に考証するもので、科学的な方法論に則った研究である。しかし一方では、Feofanovのように『証言』の路線を主張しつづけるものも存在している。これは「反体制派」としてのショスタコーヴィチ像を追い、『証言』の信憑性を否定するTaruskinらを批判するもので、これを巡ってさまざまな雑誌やシンポジウムなどで大きな論争を巻き起こした。

これらの流れを通史的に追っていくと、この曲をめぐるさまざまな解釈が、ショスタコーヴィチ研究史における受容する側の立場によって大きく変化してきたことが確認された。結論として、『証言』の影響を反映した主観的なナレーティブから脱するには、Taruskinが試みているように、あくまで楽曲の構造に基づく解釈を行う必要があるこ

とが指摘された。

紙面の都合で、それぞれの研究における第5交響曲に関する記述の引用は省略した。この発表は、立場の異なる研究の歴史と、それらにおける作品の受容史を組み合わせたものであったが、それぞれの研究の立場を確認する質問がなされた。今後の研究については、これらの“先行研究”を把握した上でショスタコーヴィチ研究における実証的・論理的な方法論を確立することが大きな課題となっている。

■ 第219回定例研究会報告

日時：2004年6月19日

場所：神戸大学発達科学部 C-101号教室

修士論文発表

田渕夏季「音で描く都市近郊－淀川流域三島江地区におけるサウンドスケープ調査」
嶋尾かの子「ラオス・チャムパーサクの民謡（ラム）に関する考察－ラムの形態と
その変容過程、情報化社会による影響」

菊地宏一郎「XMLによる長唄のデータ表現」

研究発表

直江景子「東大寺修二会の音の視覚化試論」

<発表要旨>「音で描く都市近郊－淀川流域三島江地区におけるサウンドスケープ調査」
(大阪音楽大学大学院修士論文)

田渕夏季

本発表の目的は、「サウンドスケープ」調査により「三島江」という「都市近郊」の特性を「音」から描き出すことにある。「三島江」は「大阪府高槻市」に位置しているが、数々の「民俗芸能」や新たな「マツリ」が実施され、住民同士の結びつきが密な地域である。第1の調査目的は「現在聞こえる音」を明確にすることにより、「実際に聞こえている音」と住民の聴取との間にある差異を明らかにすることである。さらに第2の目的として「かつて聞こえていた音」に関する調査を行う。現在まで残されている伝統行事に対する住民の捉え方、過去から現在にかけて地域行事に対する住民の意識はどのように変容したのかという2点を明確にする。なお本発表では「伝統的な音」、「地域行事の音」に焦点を絞って、都市近郊の音環境について考えた。

「伝統的な音」、「地域行事の音」の調査により、三島江のような「都市近郊」地域を取り巻く複雑な人間関係が明らかとなった。音に関するアンケート調査では、人間は「情報」と結びついた音を「聞こえる」と認識し、「情報」と結びつきにくい音を「聞こえない」と認識すること、また「伝統的な音」や「地域行事の音」の歴史的変遷について考察した。かつての日本社会において伝統行事は「唯一の娯楽」であったが、現在では「娯楽の増加」や「グローバル化」、「情報化」の進行により地域行事が持っていた価値は低下し、また若者は地域の祭りから離れていった。

「三島江」のような「都市近郊」では「共同体意識」と「個人主義」が並存している。また「都市近郊」での「音環境」は「自然音」と、「伝統的な音」や「機械音」も含めた「人為音」が「混在」している。「音の混在」や「地域社会に対する意識の混在」により住民は自らにとって「情報」となる音を「選択」して聞かざるを得ない。我々の周りにある「音」は社会や時代、人間関係の変化と密接に結びついている。そのため「音環境」について考えるのであれば、並行して地域が抱えている問題について考えるという作業を行わなければならないであろう。

<発表要旨> 「XMLによる長唄のデータ表現」 (九州大学大学院修士論文)

菊地宏一郎

近年の音楽アプリケーションの林立には目を見張られるが、その多くは五線譜対応のアプリケーションであり、日本の伝統音楽の記譜法に対応し、誰もが手軽に利用できるアプリケーションとなると皆無といえる。発表者はこの状況を改善すべく研究を進めており、発表では、研究の一環として開発を行っている XML(Extensible Markup Language) を利用した長唄のためのデータ形式について紹介を行った。XMLは、インターネット環境との高い親和性を備えたメタ言語で、学術分野も含め広範に利用されており、また利用環境も整っている。発表者は、XMLを利用することでデータ形式の広範な利用を図っている。

さて、発表者のデータ形式は、長唄の楽曲を記述するためのデータ形式である。長唄の楽曲は多様な記譜法で楽譜化されているが、本データ形式は、楽譜化されている楽曲を正確に表現するために、これらの記譜法に対応する。現時点では、長唄の主要な記譜法である三味線文化譜、小十郎譜、青柳譜、東吉郎譜、佐吉譜に対応している。一方で、本データ形式は、記譜法に囚われない楽曲の統一的操作の支援も目標としており、このために、長唄の記譜法の共通要素を汎化した「抽象記譜法」を定義している。また、データ形式は、長唄にとどまらず、他の三味線の種目も十分に表現できる。たとえば、三味線文化譜の形式は、長唄以外の種目でも広く用いられている形式であるから、本研究のデータ形式から他種目への対応を進めて行くことが可能である。すでにデータを楽譜表示するアプリケーションを作成しており現在は、データ形式を利用した楽譜製作アプリケーションを開発中である。なお、データ形式のみの提示では実用的なフィードバックを得ることが困難であるため、アプリケーションを利用してもらいフィードバックを得ることで、より実用的なデータ形式にしたいと考えている。データ形式に関する情報は <http://gida-u.org> から取得できる。

<発表要旨> 「東大寺修二会の音の視覚化試論」

直江景子

東大寺修二会は長い歴史を持つ厳格な法会でありながら、優れた音楽劇・空間芸術としての側面も持つ。本研究は、こうした東大寺修二会を「表演空間」として捉え、記録・分

析を行うことによって、その空間の構造を明らかにすることを目指す。「表演空間」とは、「場と時間によって構成される、聴観者の体験の世界」をさす。

発表では、表演空間の構成要素のひとつである「音」の要素の、視覚化手法についてとりあげた。「音」とは、空間において発せられる音響のすべてをさす。東大寺修二会の記録研究において、これまで声明以外の「音」の要素を詳細に記録したものは存在しない。しかし、差懸（木靴）の足音や念珠の音といった、これまで記録されてこなかった「音」の要素は、東大寺修二会において発せられる音響機構において、極めて重要な意味を持つ。こうした「音」の要素を明らかにすることは、表演空間としての東大寺修二会の、時間進行を明確にし、法要内における各次第同士の有機的な結びつきを検証する上で、重要な作業である。発表では、開発中の「音」の視覚化手法を用いて作成した、法要の記録を音源とともに解説し、その記録から読み取ることのできる法要の構造分析を行った。

(1)「表演空間」の定義 問題にしようとする「表演空間」を定義し、その構成要素を明らかにした。表演空間は「場」と「時間」によって構成される。さらに場は「精神的背景」「環境・建築上の特性」に、時間は視覚的要素「所作」と聴覚的要素「音」に分類、構成される。

(2)東大寺修二会の記録に関する先行研究 東大寺修二会の時間の要素を扱った3つの重要な先行研究を紹介した。横道萬里雄・佐藤道子『東大寺修二会 観音悔過（お水取り）』、佐藤道子『東大寺修二会の構成と所作』、牧野英三『東大寺修二会 声明の旋律に関する研究』をとりあげた。

(3)「音」の視覚化 法要全体の時間の流れを俯瞰し、「音」の種類と持続時間を記録・分析することを主な目的として、《晨朝》の悔過作法の視覚化を行った。絶対時間上でグラフや図形、強弱記号などを用

いて表記を行うことで、これまで声明の記録としてばらばらに行われてきた法要の記録を、一連の時間進行として俯瞰できるようにした。

(4)考察 - 《晨朝》の悔過作法の場合 (3)の記録をもとに、法要内であらわれる圧縮された時間に注目し、構造分析を行った。《晨朝》の悔過作法は、「緩やかな時間」、「圧縮頻度の高まり」、「圧縮の連続による最高潮の緊張」、「緩やかな時間へともどす、補完としての展開と弛緩」という4部の時間構成をなしていることが明らかになった。

<コメント>直江景子「東大寺修二会の音の視覚化試論」

今田 健太郎

「お水取り」と通称される東大寺修二会を表演芸術として見立て、その音世界をくまなくマッピングしようとする試みである。博士論文をまとめるステップのひとつとして、その研究の背景や具体的な研究方法などの途中経過報告といった意図の発表であったと思われる。

水も漏らさぬようそばだてる発表者の耳は、法要をとりおこなう当事者たちと共有するものではない。そのことは、五線譜を独自に拡張した記号体系による記譜やそれに基

づいて進められる考察において、経文の詞や法要の小段の名称をのぞけば当事者たちの用語があらわれないことから察せられよう。宗教的な世界観にもとづいて法要を解釈して記述するのではなく、あくまで耳に入ってくる音からその時空間を分節・再構成していく姿勢に貫かれている。

「聴観者」という語は、この法要を外部から見聞きする人々という意味の発表者による造語であるが、その耳の限定性に自覚的であることを反映している。また発表者によれば、この法要は広く外部に開かれた歴史をもっており、おいおいその点を論じるためにこの語を準備したとのことであった。ただ、聴観者を実体的なものとして設定してしまうと、その属性（男性／女性、VIP／一般の人など）の問題がつきまとうことになり、その限定される範囲にブレが生じてしまうと、評者には思われる。メディア研究におけるオーディエンス論などその限定性にあえて踏み込んだ議論もないではないが、法要を俯瞰するというこの論の所期の目的とは折り合いが悪いだろう。

評者がここで指摘したこと以外にも活発な質疑応答が交わされた。なにしろ1日あたり数時間にわたる法要をひとつの作品として捉え返すという、個人研究としては壮大な規模であるから、フロアの雰囲気は期待と不安で入りまじっていたように思う。発表者には、その労力に見合った説得力を得るためにも、自らの目的に適した方法をうまく取捨選択しながら研究に取り組まれることを望みたい。

* 嶋尾かの子さんの発表要旨は、編集者の手違いにより今号に掲載することができませんでした。次号に掲載いたします。発表者の嶋尾さんに、編集者の不手際を深くお詫びいたします。

■ ニュース

インドのサロード奏者アムジャッド・アリ・カーン氏が福岡アジア文化賞大賞を受賞しました。授賞式および市民フォーラムにて、氏の演奏を聴くことができます。参加申し込み締め切りは9月3日です。詳しくは、同賞のウェブサイトをご覧ください (<http://www.city.fukuoka.jp/asiaprize/index.htm>)。なお、問い合わせは直接同賞事務局までお願いいたします（〒810-8620 福岡市中央区天神1丁目8番1号、福岡市役所総務企画局国際部福岡アジア文化賞室、TEL:092-711-4930 FAX:092-735-4130）。

授賞式 9月17日（金）、14:00～15:40、アクロス福岡シンフォニーホールにて
市民フォーラム 9月18日、14:00～16:00、イムズホール（イムズビル9階）にて

● 研究発表申し込みについて

西日本支部の定例研究会での研究発表申し込みは下記までご連絡ください。

〒570-8555 大阪府守口市藤田町6-21-57 大阪国際大学人間科学部 藤田研究室
電話 06-6902-0791 ext. 2568、fax 06-6902-8894 (代表)
e-mail tfujita@hus.oiu.ac.jp

●入会申し込み・住所変更について

入会ご希望の方は、80円分の郵便切手を同封し、下記の学会本部事務所へ入会案内・申し込み用紙をご請求ください。会員の住所等の変更についても本部事務所へお知らせください。

〒110-0001 東京都台東区谷中5-9-25 第2八光ハウス201号 (社)東洋音楽学会
電話 03-3823-5173、fax 03-3823-5174、e-mail LEN03210@nifty.com

発行：(社)東洋音楽学会西日本支部 編集担当：福岡正太

〒585-8555 大阪府南河内郡河南町東山469 大阪芸術大学音楽学科 月溪研究室気付
e-mail: tukitani@osaka-geidai.ac.jp、fax: 0721-93-7914 (月溪気付)
